



今、ボランティアセンター担当者にとって大切なコーディネート力。企業との連携、福祉教育の推進、そして災害ボランティアなど、地域の課題に協働で取り組むため、コーディネートが重要になっています。ボランティアセンター担当者が押さえるべきコーディネートのポイントを連載で紹介いたします。

NPO法人 日本ボランティアコーディネーター協会
副代表理事

あおやま おりえ
青山 織衣 さん

大阪府岸和田市生まれ、在住。2019年まで岸和田市社会福祉協議会で勤務。ボランティアの参画による在宅福祉サービス事業、福祉教育推進事業、地縁型・テーマ型両方の市民活動支援を担当したほか、赤い羽根共同募金地区募金運動、地元の市民活動団体のファンドレイジング支援に携わった。2020年からは、大阪ボランティア協会に籍を置きながら、フリーのコミュニティワーカーとして活動

第5回 動かないと始まらない! ~連携・協働、はじめの一步~

「顔の見える関係づくり」「分野を越えた連携・協働」「社協の枠にとどまらないネットワーク」。

社協にいたら、よく耳にするワードですね。今、いろんなところで、ボランティアの担い手の高齢化や後継者不足が叫ばれています。一方で、学生は学校にバイト、勤労者世代は仕事しながら子育てしていてボランティアどころじゃない……。そんななか、私たちボランティアコーディネーターには、今までご縁のなかった層にもアプローチして、幅広い人の「参加」を拡げることが求められています。

そもそもなんのために「連携・協働」するのか?

困っている人からの「応援求む」の相談、その人に必要なサポートができる人が今あなたの知っている人のなかで思いあたらないとき、「そんな人はいない」とあきらめてもらいますか?

就労支援には、企業との連携が必要です。子ども食堂の運営サポートの際は食材を提供してくれる農家や商店、学習支援活動では大学生や学校との連携が望ましいです。よく、「災害時のためには日頃からの連携・協働が必要」と言われますが、実は逆。ふだんのみちづくり、地域福祉そのものが「ごちゃ混ぜコラボ」だからこそ、災害時にスムーズに連携できるのです。

「連携・協働」はゴールではありません。支えたい人を支えるために、つくりたいまちをつくるために「必要だから」枠を越えるのです。「なければつくる」のがボランティアコーディネーターです。

未知との出会いは、「私のすぐそばにある」

とはいえ、異分野・異業種の人とどうやって出会えるの?という声をよく聞きます。

「こんなことできる人いないかなあ」と探すとき、あなた自身がまだボラセ

ン担当になって間もない場合、とても苦労しますよね。でも隣の同僚は?先輩や上司は?尋ねてみると具体的な名前が出てくるかもしれません。地域の役員やボランティアのみなさんなど、あなたがつながっている人の「その先」には、きっとまだ見ぬ新たな人と接点が見つかります。

会う人会う人に「こんな人知りませんか?」を繰り返していると、いろんな出会いがあなたのところに舞い込めます。地元のNPO支援センターもぜひ一度訪ねてみてください。同じ中間支援のボランティアコーディネーターやNPOと出会うチャンスです。

出会いから「よきパートナー」になれるまで

せっかく出会った人同士も、どちらか一方が負担を感じたり、目的や進め方を共有せずに協働を進めても、いずれその関係は破綻してしまいます。

異分野、異業種の人との協働関係をつくるには、まずはこちらの価値観や要望を押し付けず、相手の根っこにある考え方や文化などを知ることが大切です。異なるフィールドでは、普段よく使う言葉も、話し合いの進め方も大きく異なります。その「違い」をしっかりと認識した上で、互いの「共通点」や「共感ポイント」を探っていくことから「連携・協働」が始まります。お互いの「強み」を活かしあい、「弱み」を補い

あえる関係は、とても強いネットワークの源です。

ボランティアコーディネーターには、異なる立場の人同士をつなぐ役割もあります。その際も、それぞれの特性、強みと弱みを事前にしっかりとアセスメントして、共通項を探すことからサポートしていきます。「対話」と「共同作業」を産みだす演出家が私たちのです。

筆者が社協でボランティアコーディネーターをしていたとき、祭礼関係者と障害者自立生活センター、プロの観光アドバイザーなどと一緒に、祭礼のバリアフリー化のプロジェクトを立ち上げました。

それまで接点のなかった人同士、最初は会議もギクシャクしていましたが、障害がある当事者の想いを真ん中に置き、「祭見物をあきらめる人をなくす」という共通のミッションを確認できるようサポート。その際最も力を入れたのは、関係者一人ひとりの想いと考え方をしっかり個別に受け止め、そこから共通項を見い出して、それに皆が気づくことができる場をつくるプロセスでした。「共感」と「共通の目的」ができると、連携・協働は無限大の力を発揮します。

まずはあなた自身が身近なところからボラセンの枠を飛び出してみましよう。その一步、心から応援します。

